

ジェイムズ・ホッグ

7 レリスタンの領主  
またはリスデイルの三人の戦士の物語

このバラッドでうたわれる出来事はリスデイルの北で起こった。この地域には三人の戦士のそれぞれの住まいと、ハーミティッジの古城と、ソウヘンツリーとラフリーの民家があった。

この物語の信憑性について言えることは、子どものころにこの地方の指物師であるウィリアム・スコットがよく語っていたのを幾度となく聞いて夢中になったということだけである。もしも彼の話をもそのまま語れば、この詩の大筋を明かす長編の詩行、「ああ汝に災いあれ」と始まる古のうたになるだろう。

「ディッキー 今宵の空は月があかるい  
鹿狩りに行かないか」  
「ああ いいとも 夜が明けるころ  
ソウヘンツリーの中州で狩りを始めよう」

月が天にかかるころ 5  
地面は吹き積もる雪に覆われた  
ハーミティッジ城の鐘が十一時を打ったころ  
郷士のディッキーとジョンは館の外を眺めていた

鹿の足は速く 粉雪は軽く舞い  
血の跡は残るまい 10  
その時ディッキーが叫んだ  
「見ろ 向こうに何やら恐ろしいものが見える

リデル川が流れる丘の向こうだ  
よく見えぬのも無理はない  
見ろ 何やら恐ろしく大きなものが 15  
こちらへ急ぎ向かってくる

ジョン あれは何だろうか  
神様 我ら二人をお守りください  
我らの想いや願いはただ一つ  
近づく輩には 一発お見舞いしてやろう」 20

「しっ 黙れ ディッキー  
落ち着いてよく見ろ

奴らが運ぶのは死体だ  
一族の者に知らせなければ」

皆を起こそうと 二人は館へ走ったが 25  
三人の侍女のほか 誰もいなかった  
そこで壁の陰に身を潜め  
ことの成り行きを見守った

目にしたのは陰惨な光景  
血も凍るような出来事だった 30  
侍女の一人はまぶしい月明かりに目が眩み  
一人はその場で気を失った

輝く武具をまとった四人の屈強な者どもが  
傷だらけの死体を運んできた  
身にまとう衣から その身元は領主か騎士 35  
垂れた巻き毛の金髪が地を掃いた

一人が話しかける声が聞こえた  
「死体を置く場所が見つからない  
扉は閉ざされ 鍵もない  
牛小屋に降ろそう」 40

そこで四人は死体を牛小屋に運び  
あっという間に逃げ去った  
残った者たちは扉の陰で息を潜めた  
ひどく驚いたのも無理はない

誰一人 牛小屋に入る勇気も 45  
死体に息がないか確かめる勇気も持たなかった  
雪の上には引きずられた血の跡が残り  
ただならぬ事態を語っていた

朝になると谷の者たちは一斉に騒ぎだした  
噂がすぐに広まったのだ 50  
レリスタンの領主が  
ボーダー地方きっての勇猛な騎士が倒されたと

前からも後ろからも切りつけられ  
左頬の骨は砕けていた  
いつもの身なりをしていたが 55  
剣や帯や兜は無かった

東へ西へ 使いが送られ  
ブランクホルムの館にも伝わった  
レリスタンのエリオットが殺されたが  
なぜ いかにしてかは誰にもわからぬと

60

バクルー公は白馬にまたがり  
五十人の家臣を従えて  
谷のすべての郷土が続々と集まる  
ハーミティッジの城に到着した

すぐにもものしい数となり

65

皆は高貴な方の遺体に触れては口々に誓いをたてた  
だが ミルバーンのジョック・アームストロングは現れず  
国中どこにも姿はなかった

「ミルバーンのアームストロングに災いあれ  
非業の死を遂げるがいい

70

お前は勇猛なレリスタンの領主に手をかけた  
お前が領主に替われるはずもないのに

ビューカースルの者どもがやりたい放題に  
リズデイルの家畜を略奪するだろう  
今や我らを護る領主は墓に眠り

75

味方のブランクホルムとサールストーンは遠すぎる」

谷の者たちはこうして領主の死を悼み  
口々に彼の功績をたたえた  
戸口では領主の犬の遠吠えが絶えず  
荒野では領主の鷹が空しく舞い続けた

80

三年もの長き月日が流れた  
二人の羊飼いがラフリーの丘で  
ひどく荒れ果てた今のありさまを  
嘆いてはため息をついた

「我らの若き王はロンドンに住まい  
バクルー公は王に付き添うお役目  
サールストンの配下の者は散り散りになった  
一体誰が我らを護ってくれよう

85

スチュアート家を妬んで

イングランドの貴族が妨げ始めた  
ひとたび法に触れるようなことが起これば  
この地は痛ましいことになるだろう

この悲しみと破滅はすでに予見されたこと  
我が国に汚点が付けられた  
それは決して洗い流せぬ  
この俺サンダップの外套の染みのようなもの」

話を聞いたもう一人の羊飼いは驚き  
あぐりと口を開け  
目を丸くしてあたりを見回しながら  
様々なことを思い返した

サンダップの纏っていた 美しい刺繍で飾られた  
あの鮮やかな緑の外套を  
この三年の長きにわたり  
教会でも略奪でも休日でも見かけなかった

また 南からやってきた二人の老女の話  
ある晩耳にしたことを思い出した  
世にも恐ろしい話だったが  
その時は何のことやらわからなかった

「どうか真実を教えてくれ  
お前が<sup>ほの</sup>仄めかすのは我らの不幸ではあるまいか  
さっきお前の話した外套が まさか  
あの領主の血に染まったのではあるまいな」

「友よ いかにもお前の言う通り  
誰にも明かすつもりはなかったが  
人がどんなに知恵をつくしても  
悪事はいずれ陽のもとにさらされるもの

だが広く良く治める神が  
その玉座から命ぜられた言葉に従い  
雄々しいエリオットが倒れたとき  
あの外套は深紅に染まった

リズデイルを流れるどんな川も  
イングランドの岸を洗うどんな波も  
あの染みを<sup>すす</sup>濯ぐことはできず

血でいまだ赤く染まっているのだ」

東へ西へ 使いが送られ 125

知らせはブランクホルムにも伝わった  
サンダップのハルバートが捕えられ  
誇り高きバクルー公の前に連れ出された

件の外套が大広間に掲げられ 130

高貴な紳士淑女も  
身分を問わず集まった者は皆  
息をのみ外套に眼を注いだ

バクルー公は口を開いた 135

「サンダップよ これは神の裁き  
真実を語れ この染みがエリオットの血ならば  
裏切り者め お前の命はないと思え」

サンダップのハルバートはくるりと背を向け 140

眼から溢れる涙をぬぐった  
「ご主人様 この染みはエリオットの血  
あなたに嘘などつきません」

善良なバクルー公は嘆いた

「ああ お前の言葉が真<sup>まこと</sup>ならば  
屈強のサンダップであろうとも  
ブランクホルムの岩山の木に吊るさねば」

「これは間違いなくエリオットの血 145

エリオットを殺したのはこの私  
地獄に落とされようと  
何度でも同じことをするでしょう

勇敢なジョック・アームストロングの花嫁 150

リズデイルで一番の花とうたわれた私の妹が  
エリオットにだまされたのです  
奴は当然の報いを受けたまで

密かに部屋に忍び込み 155

妹を胸に抱く奴を見つけました  
奴は幅広の太刀を渡せと言って  
我らに戦いを挑んだのです

ご主人様 我らが怒りにまかせて  
騎士の<sup>の</sup>則を犯したとおっしゃるか  
二人がかりだったとはいえ  
奴が本来受けるべき扱いよりましなもの 160

他人<sup>ひと</sup>の女と床<sup>とこ</sup>にいるところを  
闇討ちにすることもできたのに  
鎧を付けずに殺すこともできたのに  
戦うことも逃げることも認めたのです

雄々しいアームストロングは怒鳴りました 165  
『かかってこい 俺一人で十分だ  
天に正義があるのなら  
その<sup>よこしま</sup>邪な心臓の血が流されよう』

二人はすぐさま激しく打ちかかり 170  
はっしと睨み しっかりと太刀を握り  
両者から血の汗が流れ  
今際の言葉が漏れました

アームストロングの最初の一撃で  
エリオットの胸が骨まで裂けました  
アームストロングは勇敢な郷士でしたが 175  
エリオットほどの<sup>も</sup>猛者ではありませんでした

エリオットはボーダー地方の樫のように育ち  
その力は野牛<sup>バイソン</sup>の力に勝り  
その勇気は岩山のように  
その腕を試す者などありませんでした 180

我ら三人はボーダー地方の戦いで  
幾度となく領主や戦士たちを畏れさせました  
互いに斬り合う日がこようとは  
夢にも思いませんでした」

エリオットの最初の一撃で 185  
アームストロングの目が憤怒に揺れ  
受けた次の一撃で  
アームストロングの膝まで血が滴り落ちた

「俺は剣を握り  
アームストロングに加勢した 190

他に何ができよう あの卑劣な奴を  
勝たせるなど到底できぬこと

俺は怒鳴りました『この卑怯者  
相手になろう かかってこい  
天にまします正義の神にかけて  
お前の腕を切り落とす』

195

エリオットも傲慢な言葉を返し  
激しく打ちかかりました  
だが俺の剣の一振りに  
裏切り者は膝をつきました

200

『お前から受けた痛手をお返ししよう』  
雄々しいアームストロングはそう叫ぶと  
(己の命も危うかったというのに)  
エリオットの身体を刺し貫いたのです」

バクルー公は厳しい表情を緩めた  
戦士を失うのが惜しかったのだ  
二人の罪を勇敢な報復と称え  
サンダップのハルバートを咎めなかった

205

皆はアームストロングに同情し  
その幸せを願った  
だがアームストロングはその後十年もの間  
故郷から姿を消した

210

やがてイングランドに争いが起き  
死と悲嘆がはびこった  
民は王に齒向かい  
友は互いに反目した

215

貴族は王族に連なり  
すぐに壮麗な軍隊となる  
王の軍は民に力で迫り  
民はエッジヒルに倒れた

ラッパは響き 弾丸が飛び交った  
血みどろの争いは長く続いた  
ついに圧倒された反乱軍は  
王の軍に道を譲った

220

リンジー卿が叫んだ「戦で常に先頭に立つ  
あの男はいったい誰だ  
身にまとう檻褌の外套から察するに  
もとは身分の高い者ではないか

檻褌を纏って  
あのように雄々しく戦う者など見たことがない  
あの者の勇気が  
三度戦いの流れを変えた」

王の横に並ぶ  
高位の男が声を上げた  
「かの者はボーダー地方のスコットランド人  
自ら我らの戦いに加わった者

奴が言うには 王は優しいが 策が悪い  
このままでは その玉座も危うかろう  
お許しいただければ  
敵を最後の一人まで打ちのめすと」

王は微笑み 声を上げた  
「その雄々しいスコットランド人を連れてこい  
敵を全て従えたら  
かの者をリズデイルの領主としよう」

王は金の指輪を与え  
すぐさまに男を礼帯の騎士とした  
アームストロングは王を救うために血を流し  
王は王権を守るために血を流した

(鎌田明子訳)